

保育者養成のための音楽指導について

Musical instruction for childminder training

林 麻由美 (千葉敬愛短期大学)

Mayumi HAYASHI

(キーワード)

ピアノ演奏、相手、耳、感覚、グループ学習

要旨

保育者養成校におけるピアノ実技の授業での最終的な課題は、子どもの歌の伴奏ができるようになることであり、弾き歌いができるようになることである。発表者が勤務する学校での授業では、学生は、導入にバイエルピアノ教本を使用し、ピアノ演奏の基礎を学ぶ。

ピアノ演奏の経験がある学生は、課題を難無くこなし、初心者も大変な苦勞を伴うようだが、よく努力してそれなりに仕上げてくることは素晴らしいことである。しかし、本当に曲を理解して演奏しているかという点、それは経験者であっても疑わしい。多くの学生は、一生懸命、鍵盤での指の移動を覚えることだけに必死であるが、そのような学習方法だけで培ってきた演奏では、現場で通用するものにならないと考える。そこで、ピアノの独奏用ではあるが、バイエルピアノ教本を使い、現場をイメージし、相手がいる状況を想定できるような耳や感覚を養うことができるような演習を提示した。そしてその演習が、弾き歌いや子どもの歌の伴奏にうまく繋がっていくのではないかと考えた。

今回はバイエルピアノ教本の49番、ハ長調音階、88番を取り上げ、ただ弾くだけではなく、耳を使い、音楽を感じとる力が身に着くような演習を提示した。

49番では、独奏曲ではあるが、指導を受けている学生だけでなく、教室にいる他の学生も一緒にリズムをたたいたり、指揮をしたり、また、左手の分散和音を和音にし、パートに分けて歌うなど行った。学生個々の進捗には関係なく全員でその一曲を演奏することで、相手がいる状況を想定しながら演奏できる耳と感覚が養われると考えた。

ハ長調音階では、ベース音を付けて弾いたり、歌ったりすることで、学生は、そのベース音がとても大事であることを体感し、子どもの歌の伴奏の際の左手の重要性を理解することができた。

88番では、子どもの歌に多く見られる付点リズムを学習するが、まず、四分音符、八分音符、十六分音符、付点リズムによるリズム譜を示し、メトロノームの八分音符のビートを聴きながら、全員でリズムを繰り返したとき、この曲の冒頭のリズムを導きだす演習を提示した。

通常、ピアノ実技の授業は一人ずつ行われ、他の学生は聴いているだけであるが、ピアノソロ曲であっても、リズム打ちやヴォーカルアンサンブルなどのグループ学習を行うことにより、曲への理解がさらに深まり、必ず相手がいるという現場での音楽活動を、より有効なものにしていけると考える。